
真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

日本政府の犬(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

【Nコード】

N5400Z

【作者名】

日本政府の犬（仮）

【あらすじ】

悪宇商会直属の揉め事処理屋である星嚙絶弥。世界各国で様々な仕事をした彼は、日本へ戻って最初の任務が舞い込んできた。その内容とは まじこいと紅のクロスオーバーです。紅は設定だけを頂いて、舞台は川神学園です。

主人公設定

ホシガミ セツヤ
星嚙絶弥

男性 21歳

職業 揉め事処理屋兼悪宇商会社員

身長 182cm (標準)

体重 80? (標準)

髪型 赤毛で短髪

趣味 読書 (面白ければ何でも読む)

特技 何でも食べられる 速読 刃物の扱い

好きなもの カレーなどの庶民的な食べ物 本 家族

嫌いなもの 他人 自己中心的な人物 高級な食べ物 (食べても味の良さがわからない)

裏十三家の一つ、星嚙家の一人。

全身を“星嚙製”の高い技術力をもって作られた超高性能の人工臓器や義手義足に入れ替えており、超人的な戦闘力と耐久性を持つ。

所謂サイボーグいわゆると言う奴だ。“星嚙製”技術力は九鬼家の力を持つとしても再現することは不可能で、計り知れない謎めいた力が宿るサイボーグと言ってもれっきとした人間であり、肉体の危険信号として痛みや苦しみも感じれば、もちろんセックスも妊娠させることもできる。

悪宇商会とは裏社会では最大手の人材派遣会社。裏世界で五本の指に入る程の規模の大組織。戦闘屋、殺し屋、呪い屋、払い屋、逃がし屋、護衛屋など多種多様な人材を揃えており、裏社会での一流の人材が多数所属している。依頼に応じて適した者を送りこみ、報酬を得る。その活動には善悪の区別もポリシーもなく、金次第でどんな犯罪にも加担し、どんな犯罪の解決にも協力する。政治家やマフ

イアに利用されるケースも多い。悪宇商会の構成員は全員が人殺しの経験がある。

その中で絶弥は戦鬪屋、殺し屋を担当しており、悪宇商会での実績は上位に食い込む実力者。

主人公設定（後書き）

ども、日本政府の犬（仮）です。

この小説は紅の世界とまじこいの世界が混合した世界です。

ですので、多少世界の設定がおかしい所があります。

自己満足で書く小説ですが、感想お待ちしております。

ではまた次回お会い致しましょう

零話 『長期依頼』

毎度毎度ながら、妹は人使いが荒い。

俺はアメリカ、中国、ドイツと世界中を渡り歩き、依頼を熟して休み暇無く次の仕事を入れるとか鬼だろ。

しかも長期の仕事とか面倒臭い。まあそれなりの報酬を貰えるから問題無いが、正直休みが欲しい。

「なあ喜美香。いつそのことハワイ行きの飛行機に乗って、そのままバカンスに行かないか？」

「バカな事を言わないでください師匠。絶奈さまに怒られますよ」
素っ気ない顔で冗談を冗談だと受け取らないお堅い思考の少女が、着替えなどが入った旅行用スーツケースを轆きながら答える。

白魚のように白い肌に、光を通すと透けて輝く美しい白髪。それとは対照的な黒いスーツを着込んでいるので、白い肌や髪が無駄に強調される。そしてアルビノ特有のルビーのように紅い瞳。

名前は馬紋喜美香。俺の弟子で身近の雑用を任せているパートナーだ。

今回も依頼を執行するにあたって、色々な雑用をさせていた。例えば日本食が恋しくなった俺の為に、事前に持って来た食材で日本食を作ったり、海外のホテルが汚かったので部屋の掃除をさせたり。

海外で一般のビジネスホテルに泊まった人は分かんと思うが、汚いんだ。

部屋全体がカビ臭かったり、前に泊まった人のモノと思われる髪の毛が落ちていたり、壁に穴が開いていたり、布団に穴が開いていたりと最悪の環境だ。絶奈の奴、もっと高級なホテルを用意してくれ。今度からは実費で良いトコ泊まろう。

「……はあ」

「師匠どうかしました？」

「毎日毎日絶奈からの仕事で疲れているんだ。それくらい察してくれ」

「それは失礼しました。どうぞこちらへ」

見れば喜美香はうさぎ跳びの姿勢で俺に背中を向ける。どうやら背中に乗ってくれと言ってたんだろ。

「師匠、早くしてください。もうすぐでお迎えの車が来ます」

「おいおい……少しは考えろよ。女の子におんぶされる男なんてみっともないだろ」

「それもそうですね。ではどうしますか」

「いや、自分の足で歩くよ」

まったく、やはりこいつは常識が多少欠落してんな。常識くらいは

教えなきゃならんな。これも師匠の役目。こいつの保護者代わりにある俺の役目。

なんでこいつを引き取ったかなあ。

思えば俺が喜美香を育てる義務も弟子にする理由もなかったはずなのに、いつの間にか弟子になって、俺の身の回りを世話をする家政婦的存在へとなっていた。

あの依頼が無ければ、こいつは死んでいたからな。

「喜美香、次の仕事はなんだ？ 長期以外何も聞いて無いんだが」

まあ面倒だから半分聞き流したんだけど。

「はい。次の仕事は長期で最大一年、最短二ヶ月の期間、マロードと呼ばれる本名不詳の人物の命令に期間内ずっと従います。そして今回は潜入任務です。師匠は神奈川県の川神市に存在する川神学園の二年生として転入します」

「マジかよ……21歳で再び高校生になるなんて予想も出来なかったぜ」

「ついでに私も一年生として転入します」

喜美香が勉強出来るか心配だ。二年前に十三歳で俺の弟子になって以来勉強なんてしてないだろうし。俺も頭良くないから勉強面が心配だ。

「何が嬉しくて学園生活を再びしなきゃならんだ」

「師匠は嫌ですか？」

「勿論。大体こつち世界で生きる俺達に、学校の勉強なんか微塵も必要ないんだ。最低限の表世界のマナーを知っていれば十分」

「私は楽しみですよ。学園生活」

そりゃまた意外だ。こいつの事だから任務としてしようがないとか言いそうなのに、楽しそうか。

「だって師匠と一緒に学園生活を送るなんて、今後の生涯では味わえませんから」

可愛い奴。

俺と一緒に楽しむ、か。ならもつと嬉しそうな顔をしろ。この鉄仮面め。

まだまだ子供だと思っていたが、やっぱり子供だ。無邪気で純粹な心を持つ喜美香らしいと言えばらしいな。

だが良い機会だ。ここいらで喜美香を表社会の常識に触れさせるのも悪くない。

そう思いながら迎えの黒いリムジンに乗り込み、悪宇商会の本拠地で妹の壻ウヅである本社へ向かった。

零話 『長期依頼』（後書き）

どもども。日本政府の犬、略してマツポとでも呼んでくれても構わない日本政府の犬（仮）です

最初に言っておきます。オリキャラの馬紋喜美香はメインヒロインではありません。メインヒロインはまじこい原作から決める予定です。

なのでバンバンどんな原作メインヒロインが良いのか書き込んでください。

ではまた次回の更新時にお会いしましょう。 Bye Bye！

巻話 『九鬼家の家来』

午前中に川神学園の編入手続きを終え、俺は本屋で立ち読みを五時間ぶつ通した後に晩御飯を食べようと繁華街を歩いていると、アイツがいた。

アイツを面白半分で尾行すると、丁度良く人気の無い裏道へと入った。

俺に気付いたからか、もしくは裏道の先に用事があるかは知らないが好都合。接触してみるか。

俺は道を先回りして偶然を装う設定で接触しよう。

「よう、偶然だな」

「ッ！ 何故貴方がここに!？」

「何故つて、見た通りだろ静初^{シンチュウ}。21歳で再び青春を謳歌しに来たぜ。しかし裏世界から足を洗ったと聞いていたが、まさか九鬼家のメイドなんて。お似合いだぜ」

俺は身に纏^{まと}った川神学園の制服を手を広げて披露する。

九鬼家の従者部隊のみが着用を許されるメイド服で身を包み、鋭い目つきの所為^{せい}でとても従順なメイドに見えない中国人の女性の名は李静初^{リーシンチュウ}。数年前裏世界から突然消えた顔見知りだ。

悪宇商会程ではないがソコソコの組織に属していた暗殺者。暗殺専

門の殺し屋で、暗殺の実績を見れば悪宇商会に引けを取らないが、真正面からの戦闘は苦手だったはず。

「……理解しました。私を尾行していたのは、まず九鬼家の側近を一人一人葬り去る算段ですね」

あ、尾行していたのが普通にバレてたんだ。流石元暗殺者、簡単な尾行は直ぐにバレるな。

「おいおい。無駄な勘違いをするな。確かに依頼で川神学園に入っただが、それだけだ。まだ誰を殺す予定は無い。ま、依頼されたら殺すけど」

静初はマジシャンのごとく突如右手に鐔つひの無い日本刀、左手にはクナイが数本など多数の暗器を取り出した。

流石は裏世界でも屈指の暗器使い。俺が気付かぬ間に武器を装備するとは、腕は落ちてないな。いや、むしろ腕が上がっている。

「っーかお前丸くなったな。昔は誰も信じないで、組織の任務だけに心血を注いでいたのに、九鬼家に飼いなされたのかぁ？」

「黙りなさい。正直に答えなさい。貴方は何で私を尾行して接触をはか図ったのですか？」

スツと日本刀を俺の喉に軽く押し当てる静初。だがこれでは俺を殺せない。

「ちよつとした好奇心だよ。それにお前、こんなチャチな刀では、武装した俺を殺す事どころか傷を負わす事も出来ないぞ？ 時間と

武器の無駄だ。幾ら俺が武装してないからって、舐めてんのか？」

「舐めてはいません。客観的に見れば私の勝率は0です。ですがここで引いては九鬼家執事部隊の名に恥じます」

変わったな。良い意味で。何かの為に闘えるなんて、お前が羨ましいよ。

「ここで闘っても良いが、俺にも予定つつーもんがあるんだよ」

「それなら早く、この川神市で何をするのか白状をしてください」

「昔っからの付き合いなんだからわかるだろ？ 依頼内容は決して誰にも漏らさず迅速に仕事を遂行すいこうするのが悪宇商会の絶対的条件。

例えお前に関係ない依頼でも、他言無用。だから話す道理も理由も無

ターンツ。

俺の脳天に一発の銃弾が命中した音だ。しかしその銃弾は被弾した瞬間には、別の方向へ跳弾した。

「……ってえな。ちつとは落ち着こうぜ、静初のお仲間さん。本当に俺は争う気はねえよ」

「……何度か話で聞きましたが、本当に全身が機械なのですね」

その通り。生半可な銃火器では俺を倒せないが、今の俺では二人相手はキツイな。静初の判断が速い。尾行時には既に呼んでいたのか？

『ファック！　なんて奴だよ。確実に脳天に命中したつてのに！』

10階建てのビルの屋上に金髪のメイド服を着用してライフルを所持した外人がいた。アイツはステイシーか。『血塗れのステイシー』ちまみ。いやあ備兵で数多くの戦場と修羅場を潜くぐった実力者が、今や九鬼家の従者かよ。測り知れないな、九鬼家の戦力は。

「アイツ胸でけえな」

中々の大きさだ。あれくらいの乳に顔を埋もれてたいな。つかヤリたい。あの胸で色々な事を。

「良くそんな無駄口が叩けますね。状況を読めないんですか？　既に九鬼家の者がここいら一帯を包囲し始めていますよ」

「え〜。俺まだ何もしてないはずだけど？」

「そうせざる終えませんか。貴方の場合」

「過大評価ありがとうございます」

「それは皮肉ですか？」

「当たり前。俺をこの程度で抑えられると思うか？　どうせなら序列零位のヒュームを連れて来い」

「さらつとそんな事を嘘でも言える貴方が怖いです」

「嘘は言って無いぜ？　お前程度なら逃げるくらいはお茶の子さいさいだ」

はあ、と静初は溜息を吐き、呆れかえった。多少俺への殺意が消え去った。

おっと。静初との雑談を楽しんでいる暇は無さそうだ。10……いや23人に囲まれてるな。ここで戦闘してもデメリットしか残らない。どうにかして穩便に済まさないと。

依頼の前に街で暴れたり、九鬼家に喧嘩を売るなんざ、デメリットだ。それに九鬼家に喧嘩を売ったと妹の耳に届いたら処刑される。

「まあ話し合おう。どうすれば俺を自由にしてくれる?」

「……」

『てめえが正直にこの街で何をやるのか喋ればいいんだよ!!』

「だからさ、さっきから言ってるように、依頼内容を他人に言うほど俺はバカじゃねえって」

「……わかりました。今回は見逃しましょう。しかし、貴方がこの街に来たことは九鬼家に報告します」

『おい李! なに言ってんだよ!? こいつを見逃して、英雄様にもしもの事があつたらどうするんだよ?!』

静初はまたしてもマジシャンのごとく瞬時に隠した。隠し芸に困らない特技で羨ましいこと。

「静初は話が早くて助かる。また今度な」

『てめえも動くんじゃねえ!!』

「ステイシー、少し落ち着きなさい」

『落ち着いてられるか!! こいつは私や李とは次元が違う、百代レヴェルの戦闘マシーンで殺人兵器だぞ!!』

ステイシーは両手に機関銃を持ち、俺に標準を合わせる。

『どけ李!! どかねえならお前ごとぶっ殺してやる!!』

「だから落ち着けと言っているのです」

静初は味方に、清々しいほどの真っ直ぐとした殺気で動きを制止させる。

「ステイシー、貴方の武器では星嚙に勝てません。勿論私のもでもならばここは一旦身を引いて、英雄様の護衛の強化と、今後の対策を練るべきです。ここで無理に戦って、全滅しては意味がありません」

『…… つく、わかったよ。確かにお前の言う通りだ。一番殺傷力のあるライフルで掠り傷も負わせられない相手は初めてだ。一時撤退するよ』

ステイシーは撤退宣言してものの数秒で俺が探知できない距離まで離れて行った。それに連れられ困んでいた奴らも気配を消した。

静初は全員持ち場を離れたことを確認して、俺との雑談を再開した。

「話は変わりますが、用事とは？」

「ん？ ああ、これから弟子と一緒に外食さ。こっちに引越して何も食材も買ってないし、面倒だからファミレスだ」

「貴方も変わりましたね」

静初はフツと軽く口の端を上げて笑った。何だかバカにされたみたいで不愉快だな。

「『孤人戦艦』^{こじんせんかん}なんて仰々（ぎょうぎょう）しい二つ名を返還したらどうです？ 前の貴方も私と同じく、自分以外の人をゴミのように扱っていたのに、まさか弟子を取るなんて」

「変わってねえよ。今も他人はゴミ以下だよ。単に弟子の奴が他人じゃなくなっただけだ」

そう。俺は静初とは違って何も変わっていない。

元々他人しかいない世の中に、たった一人大切な人を見つけただけだ。こいつの為になら何でもやってやるって奴を。

多分この感情は恋愛では無く、家族みたいな感覚だ。例えば可愛い妹が出来たみたいだ。……絶奈は義理の妹だから全然守りたいなんて感情は皆無だ。

「そうですね。でも良かったではありませんか。他人以外の人と出会えて」

「ありがとよ。そっぴやお前、肉まんの匂いがするぞ。太んなよ」
そう言うと、静初は顔を真っ赤にして俺のケツに蹴りをかました。
ジョークなのに……。

巻話 『九鬼家の家来』（後書き）

コンバトラー。いつも皆の心の隅でウジウジしているマッポです。突然ですが、この作品、真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花の正ヒロインを取り敢えず一人だけ投票で決めようと思います。

決定方法は、感想に書かれた希望するヒロインで一番多いヒロインにします。

現在1位は百代です。皆様の投票をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5400z/>

真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

2011年12月20日01時57分発行